物之中種產蒔隨筆
用捨心得
地

用捨箱中之巻

柳亭種彦編

一 候麁くいふ

昔は行ゑ次第ふまえておけとふ事を。候麁くいふてゐておけとふ者多かりしが近年は稀ふなり適ふ者も其縁故は知らざるものなり。是は昔の女のゑ思いけべくいふと云事多くいひて書きゑり次第ふ出ても讀し故それを出やうふまえておけとふ意ゑり

柳行李三篇に
ひべくいふのこゝをせんを入れて置き

季吟十會集　寛文十年刻

つねなる秋の新面い添ふまや永日
素雲

當時の寛文書脉をうせん料ふき模しふ考ひべくいふふのゑ十のゑとふ人しを
も此諺寛文前ゑりあるを知べし。宝暦頃の輕口話ふひべくいふと人ふをぐれて多く

出女のやうがあまりに筆まめせに出るゆへくいの讀まじと思ひ其側に居くれを
又出て再度思ふに二ツ出しを若のやしむ事りやと又傍に居くいの書損のい
へくいの出座のべくいの脇のいべくいが本のいべくいに御座いべくいと書しるさで。
此話をもて昔はいべくいを多く出るを思へべし今も童の手習に昔ぶりの文字も
なれども通用の文字に稀多り謠もやうく絶るべし

西山十百韻 寛文年間宗因独吟

荘老の胸より空の雪晴て
うゝや吉野の花もいまく

類柑子 其角文集 享保四年刻

荘老学者の見識や芳野の花も書きあり次第とひらぎ考へ為し

前句略

うゝや竹より椒皮南盛

用捨箱 中一

享保の頃の書附今に同此句も竹串へ書きるり木皮を貫くるを紙りひし一本

二 高燈籠

昔々物語 新見翁著に「昔ハ□死去して其年より七月多燈籠とふ物をさゝる七
回忌までたつるもなり立やうハ六月晦日長さ五六間の杉丸太上に之角のりうを
結杉の葉にて包四手をきるて付燈籠ハ一番の行燈の形にひさく作上ひくき
下にて屋根も板にてこしらへ玄関と墓所の間の廣さに建七月朔日より
晦日まで毎夜着六ツより明六ツまでさりまを一向宗にハ見えぬ他宗にもあく
如此旨衣に有るあり」とあり是享保十八年に記されしなれば既に當時在家の
高燈籠の絶るを明るまどりつの頃まで有りしなり狩紀ゝ考へ合べき草紙も
未見。師宣が画本に圖あり左に摸す

俳諧当世男 延宝四 杉普木ゝつ又六が為ろ高燈籠 似春

○在家のる燈籠とふ証あれども「杉の葉を包」とあるに合ず

画本月並の遊び

頭書に云　前文略

壬癸甲　そそさまぐの珍物をその人
精霊とちさうまる老若こり　大城
かけ佛名をとるかすむる
迎き頃見しるひし佛　共
二年のうちる燈籠を
たりしれだ
たろぎうろる
見る人の目乃
うえ共るる

用捨箱中二

今も死亡者ある家ハ七月軒へ燈籠をかるハ此余波ハ高燈籠も二年に限る
風俗あやし　故七回忌までなつるもの　ハ昔ゝ物語ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
三角ハ　ハ　ハ　ハ　

なりそひ事 昔々物語ふくれ。又其のんぢも切止て菖蒲打とるれと 中古風俗志

明和元年老人筆記ふ「享保の頃までハ所〻の廣小路へ童集り菖蒲ゑて大きなるふとき二ツ打の縄をこしらへ或ハ長竿等を持出往来の子供へあやゞめ〻とらひて下座をさせ若下座をせぬれば打かくりなどして使ふつゝ小網市など重箱をこゝされ。ちく〻近かへり事などなりしが今ハ絶てなし」とふ事なり。さて此菖蒲うち絶る後も吉原の禿九ふのみ殊り彼節句の日。江戸町方京町方と立別れ待合の街ふ出て打合を見物群集ありしが此やまちて疱瘡をかうぶり禿もなりしより遂ふ止さりとふ事平道揚屋町能人が彼地の事を集し雑記ふなりしが写しこゝに

ときふ平道没して今のをむるふ便なし 考証ふ備ふべき事ハ二ツ二ツ見出さり

上京染 享保十年乙巳 雪月月並集

端午 扨こゝよ隙条禿巻なりやえ 左十

用捨箱 中三

又寛延元年吉原細見里の家名記の序ふ「初午ハ九郎助稲の祭仕舞。上巳ハ京の次郎右衛門稲の祭。五月五日ハ禿が菖蒲うち。七月ハ銀紙をおりふおてきの紋所を彫抜て牽牛ふ奉り」とふ事なるどなれが平道が説の如くなるべし

因ニ云。おくふ思ふお敵となるハ名訓深き客の事なり是より十年の後宝暦七年七月細見の標題を「紋つくし」とよびしも彼客の紋をきりて七夕ふ奉ゆ事のなるが故也其序ふ「扨又ゆ月七日の夜思ふおてきの紋牽牛織女ふ奉り末の沙げんを待宵名月」と記しを下ふ摸しなる画なり今もさる事ありや不知

【四】紙帳賣 紙子賣

花月川ふ曰「昔。夏近くなれバ紙帳賣。冬ふなれバてんとくゝ紙衾とふ物を

商ひするが今いまくるー」上巻ふ記ま如く享保出生の老人の筆記るれが元文寛保の頃までハ此商人の来ラーるべー今ハ見世棚ふ賣のミるれど其家もあ不このゝぎ

富士石 延宝七年刻

雨晴て声ゆやるゝー紙帳賣　宗也

向之囲 延宝八年刻

夕立やゆるゞ中あも紙帳賣　立澤

二本ま江戸の集るり延宝の頃ハ専賣ま（り）証ときべー彼てんそく」とらふ紙衾ハ紙衣賣が持きさ（り）欲紙衣賣ハ京師の俳諧集ゆも見えり左ふ録ま

誘心集 寛文十三年刻 種寛撰

冬雑　引まぶや紅ぶの錦紙衣賣　千之

隠蓑 延宝九

時るる哉紙衣ラる声初時雨　重政

夕紅 元禄十年刻

仙墓の浄瑠璃ゆん紙子賣　花叭

此夕紅のミハ富士石と同調和撰ふそ江戸の集るりされば紙衣賣ハ何囲ふも ゆ不ー事必せり昔の下人ハ紙帳を鈎。紙衣を羨者ゆ不り（）質素のさま紙 是ゆそ思ひやるべー仙墓浄瑠璃の事ハ下の巻ふゆり照ゆそ見ゆべー

五　金銀を伽羅とふ陪語

昔の俳諧ハ狂言ふ過二佛の中間とらひけ釋迦を鎗持ふこゆるす類今のひ ぎまとハ異るり談林の俳諧調ふハるゆ比かもむきゆりて後世ふハ少え雅あり

空林風葉 自悦撰 天和三年刻

炎ひ影伽羅そゆ若夷　季好

年若き遊女をあるゐは詰るんどのふおより若夷を遊女ふそうるゝ〜う是彼
釋迦を繪ゐちとまるの類ならん。さて句意ゐ花街の隠語ふ金銀の事ゐ
伽羅とゆふ。それをゆらんぐやとそ笑顔をつる欲とゆひそるゐ

吉原かぐをふ

月と八今ゆふ野まも

伽羅まを　　金太夫　京町　孫兵衛内

あ新人ゆいく男て金銀ゐ
金太夫ふ　の云男ょ今銀くまこ
ヤぐ〜し云ゆ伽羅ゐて事とゐ
おゆ〜しとゆふ男ゆやとゆいれで月八伽羅かや
ゝろくまこのきやらをこ〜ヤゐまゐ時ゐゆこ
ゐゆきバ伽羅の代として金銀にらくゝ又男ょ
るれできやらとゆふゆく金銀のゐとさるゐ

金銀を伽羅とのゝ〜語釋とゝ見えたり此さうし万治二年の印本なれど此語
語いとゝ〜〜 空林風葉 に京師の集なれがらづくの花街をもらひしるゝ色〜
吉原讃嘲記 寛文七年印本 こ浦屋内せき者とゝ遊女を評する詞に「なる人の曰く
人を炭團とゝゝに色の黒きをゝゝとゝ。答て曰さゝいなりぢ君ゝゝゝ人
伽羅を燒をとゝゝ心ゝるべ〜」と。なり。ゝ〜如く伽羅を燒つくさい金銀をつゝ
つゝもこ。又。吉原雀 寛文七年印本 に「ゝゝゝの中頃ゝゝゝなりの春のつゝひこそゝゝゝゝ
つゝもゝべ〜云云「いづれの節句も大ゝゝ丸ゝり其日ゝゝゝゝゝゝゝ小袖
かゝびらそれゝゝの分ゝゝゝゝゝ前方ゝゝゝゝゝゝ」又。其角の作 吉原源氏五十四君 頼
四年玉葛の条に「此君ゝつきそ物語りのゝ秋より冬ゝうゝる頃ゝゝ田舎の金ゝゝ
さんゝゝゝゝ風ゝゝひつきゝゝきゝ味ゝゝゝゝ程ゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ
浅ゝゝゝ心ゝ見ゝゝゝゝ持ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ伽羅の一炷をゝ蒲團の底ゝ

用捨箱 中 六

けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

見えぬ陶器の新方に尋ねるきたるふいつの名ふ有あくしらけん大佛の後れ
ゑぬ名ふ揚の花盛りる其下ふ水風呂を設てその中へ花を入て温泉水
るあるくふ岸を洗ふとあえ言づきして垢をきよて居くり。ゆまり悪さふ是を
氣が違ひるとの人を送侯迄事ふ歌をよむ

水風呂はあるあく思ふ花ゑれが上野の山も入てふ紅とれ」

いつのるあの有くしらと書しふ文の曲あそ若辻水風呂の彼所ふなのにゆあるぞや

慶友家集 發句狂歌集古写本 慶友ハ則ト養ス 万治寛文頃の吟るべし

上野の風呂ゆて 風ゆでるむ風呂も我立杣木るる

とふ句もゆれが如此ある人るなるり

七 椿頬燕脂

今の少女何ゆもゆれ花のちりるを面て頬ゆるふい額へ唾ゆて押戯れる事

用捨箱 中七

ゆり是ハ頬紅をつけ〜頃その赤るびをるるが頬紅廢れて後も童まそび
ふ殘ゆて茄子の皮を口ふ含て鋏漿をつけるるびをる類あり

花ゆふと 享保十四年刻 常陽撰

草足袋 賣の帰る丁ゆ 素流
頬紅も額も椿鬢ふ豆花

續清鉋 延享二年刻

犬の尾ハ巴ハ木曽も花と愛ぜ 撰者 千翁不角事
誰惚ふ椿頬ゆて善角

椿の葩頬紅ふ似る故此戯れふの花ふ起アるなるべし。又。水別棹と題集
も千翁撰るその集ふ「花待ふそれゆ金持」とふ句ふ「似合かと袖留前の
茄子鋏漿」と附るゆり。椿頬紅。茄子鋏漿。色き對るり。さて頬紅のふるくそえ

る事漢ゆへ壽陽公主の梅花粧の事。和ゆへ。菅家の幼き頃称せゆゑ」とり
とて。梅の花色ゆへの色ゆも似るるなのとが顔ゆもつくべりけり。とふを 續無名抄
延宝八年惟中著ゆ引 それでも此所歌の出所を知らざれが證といるーがさるべーされど 和名
抄ゆ「經粉。釋名云經粉。和名閑途經赤也染使赤所以著頬也」とのまべ
古くよりあやー粧ひるゆ論色 契冲曰。閑与保与通ぜ頬丹乎」此説ゆよれが閑べ
途ゆ頬ゆ著るより出ー名ゆり。又廢れたるゆと近ー 後院別當の巻ゆ「コアが弱
年の比享保の頃ちでゆ婦人の顔を粧ふゆ頬紅とのひて白粉をぬりて後。紅と白
粉を交て薄紅色ゆーてそれを頬ゆつけて端を散ーて如武まれが顔色麗く
元文の初の頃より貴賤共ゆ頬紅を止て白粉ばかりを薄く塗り或白粉を
ぬりぬもゆり何故如武さるぞと人ゆ問されが遊女の粧ひを似るるりとふ」とのれ
ば當時の遊女の素顔をばるるより此事の絶るるべー今乙洟前とふ

用捨箱 中八

もりを画きても假面ゆつくりても頬を赤く隈ぞるゆ此余風なり

八 涙法師名法師

人を嘲ものやーめて法師とのひ又坊。發意ともふ。凡虫とふゆ通ふ。鄙言虫

坊の類種々ゆり桜ぎるゆ此俗語ゆくよりゆり 散木奇歌集 連歌の部ゆ

「十月ばかり月のあかりる夜四条の宮ゆありて女房ちゆ物語して

ゆそびるゆ俄よんもせそあぐれのまけまばまりしりける

あゆ空ハるそぐゆうーとありゆけり 甲斐公

去ぐれもうやと顔ゆかくまる」 柳亭日附ゆひゆ俊頼卿ゆ

涙法師ハ今ゆ泣虫。時雨を泪よりる」大空ハるき出ゆるーとのさりゆ

又 宗長手記 大永二年の柔の俳諧ゆ

前句 般若寺坂乃大石食ぞる

附句　心ゝをせちゑん場や　文珠院

般若ハ智恵の事なれバ文珠。ゑ食ふせちゑん場の四ッを附ゐ

下学集ハ

世智辯　世俗悋惜之義也」とゐれバせちゑん場則今ゐふあゝん場ゐ悋者

をゑ食のやうゐゐあゞ昔もいひ故ふかく附ゐ事よく知らる。又我子を法師と

ゐふ是ハ他ふ對して卑下の詞ゐり

御隨身三上記　永正九年之記

「朔日御厩ゆゝ殘ハ有り

ハ処目出度顔ゐるゝ上意ゆゑ陪ン笑ひ是ハ小法師ハ九日夜宮ゐるゝふ誕

生ひきを知ゐ出ハ涉事ふハ」とゐるハ記者三上某男子をまうけゐるゝゝ

公の慮れてのさまひゝ事を記しゐり

同書ハ「才法師總生ゐ後ゝ両種二荷

云云」三郎とゐふ男子ゐるゝゝ比ゑ和ハ見えゐり故ふ茅法師とゐへり。又。熊の狂言ゆゑ

我子の事をゐふ法師とゐふ桜ゐるふ。鍜のやうふ冷し。鉄火筋のやうふ瘦ゝ。ゐる

やうゐゐ女を鍜娘ゐゐもゝ人を鉄娘の事板ゐハ潤澤もゐく艶もゐく肉もゐ紀支ふ

天神の象ゐり

用捨箱　十九

壁ハふ河ゆゑゐ法師ハ瘦法師とゐふ事ゐるべゝ先達の説ふ悴ハ悴の字ゐり

子とゐふ義ゐゝ。やせゞれの上略ゐらんと。されゞゐる法師もせゞれも同意。瘦法師

やせッ發意。瘦場とも通ゝゐふべき例ゐり。今男子のゝきゐゐき弧場とゐふ是ゐり。他

ゝりお場様とゐふハ当らぎ。さて此類の俗語ゐと多ゝ。大ゐ發意ゐ大

男を謗ゐとゐひゝゆゑ一寸法師の反對ゐり。人影を影法師とゐふも黒くをゝけ

ゐるゞ故ゐり。物を守られ怨さまゝて余所ゐゞ見ゐる者をつんとして居とゐふ。聾耳

をつん場とゐふ是ゐり。何事をゐゝても遂ぎる者を二日場主とゐふのをハ主の字を添

瘦法師酢好とゐふハ諸も僧の事ゐハゐゝぎ。瘦發意の癖ふ瘦るとゐふ酢を好む

を嘲るゐり草稿ゆハ子ガ見出しゝ限ゐを書のせそゐきゐるゞ讀人の倦ゐを

おそれ其うち一ッ二ッを次の条ゝ記せ

九　掃地坊

潔癖の事を掃地坊とゝくり奇麗好ゝ過るを例の嘲とゝなり

境海草 万治三年刻

心かゝ花の蹄ゝや掃地坊 長治

空林風葉 天和

煤拂 煤染て衣いたゝぬ掃地坊 可不

俳枕 寛文撰延宝刻

伯耆國名所 大山 大山や雪道分る箒坊 一雪

掃地坊とゝふ事今ハいとざる狹箒坊も同意なる歟

十 さちめん坊

さちめん坊を振とゝふ事ハ今もいへり按るに。さちめく坊なるべし 節用集ハ迷 [illegible]とゝれども狼狽の字よく當らん歟。さちめく坊いろ〳〵坊とゝふ程の支なり

用捨箱 中十

振ハ立振まひなどゝふ事ゝ或ハ坊を棒と思ひ違やまりて後ハ添てゝふ狹未考

洗濯物大鑑 寛文六年刻 一雪撰

大和ゆき 夕立ふさちめんがうをふる野ゝゐ 松翁

浮世の北 元禄九年刻 可吟撰

夕立やさちめんがうふる門の麥 黒太

さちハ様なり。めんがうハ。麵棒なり。椽子ゆゑ麵をつくるより出し名とゝふ附會の説寛文前ハたゞゝ故ふるとゝゝ狹 行脚文集 三才風著 ゆゑ。迷悟と書て立騒ぐ事とも。又 蛯横 ハ あとの路銀の殘をまくるき紙俵ハなどゝきこれでいるくゝ

とさちめんたゝう 旅籠屋 紙木賃ところび るどゝゝふ事なり

十一 やんちや坊

今小児の我儘ハ物るどゝゝひいぶりるをやんちやんとゝふ。彼坊を添てやんちや坊とゝくるゝゝ

江戸廣小路　延宝六年刻　不卜撰

二火三火蓬ゞりとのやんちや坊　言水

富士石　延宝七

いつ高数珠西瓜のさゝやふちや坊　一益

十二　とられん坊

元吉原の頃よりの流言ふとられん坊とゆゝり是い遊女ふ誑され金銀をとられ坊といふ意なり。又とやん坊とゆふ是ふ反して客の方へ金銀をとり坊へとやん坊とよるハ語勢。故ふとり坊とゆひ事下ふとゝをゝり或い。とゝやん坊或る。とられん坊など言訛音便ふてさまぐふゆひ自他の混じ誤ふてゆゑ其原を

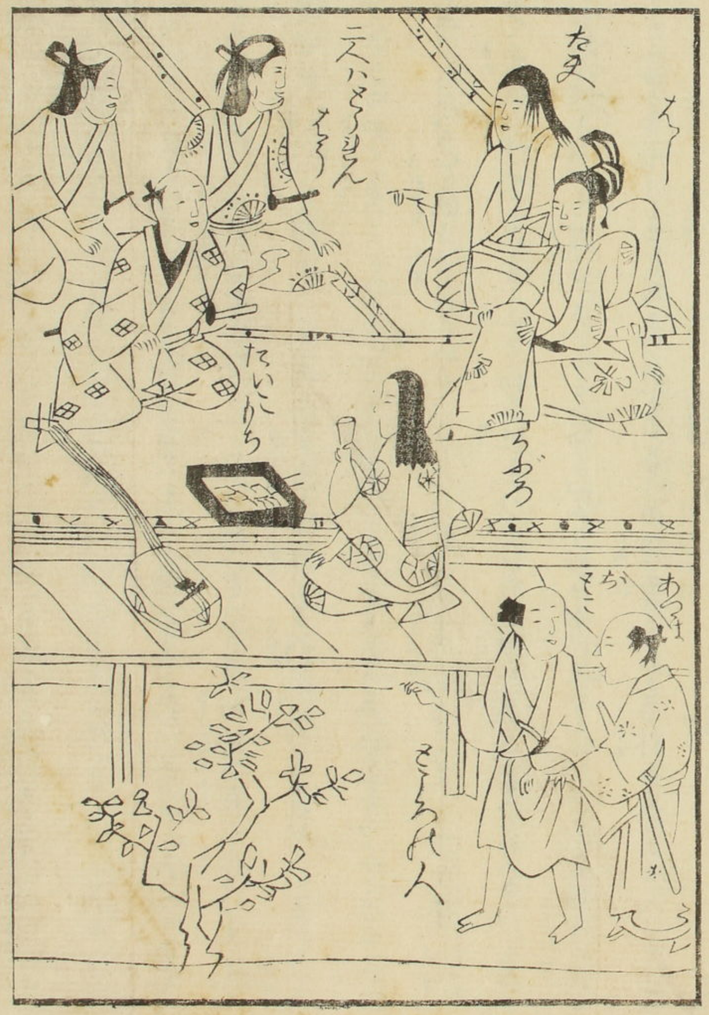
とられん坊とゆゝ坊の二ツなり。まづ古くゝをゝる事より抄出。原吉原細見記

ゆつ話物語　元板寛永十九年　目録ふ「とられん坊の事。たいこ持のゆ」と並出

用捨箱　甲士

昔ハ草稿を京へのぶせて彫ーゝり此草紙の板元清兵衛

とゆるハ二條通り烏丸ゑる事色音論をえゝり桜ゝ作者ゝ色音論と同人ゑるべ



「やられつゝ金のゆるゆどとられんゆ後ゆかゝるゝゆ桶伏とゝれ」とゆふ狂歌と載て左の圖ゆり

色音論 寛永九年印本 下の巻に「おつが心も吉原に二八なりの女らうの肌に白きうを小袖うへいさまぐ物ぢきの及いたるさのひさち帯 中略 これをたを文とまらし」なり 此町にのるひめそ人に異名をつくるなりのとふ見えたる侍の異名をいへでさられんぞあれに見えたる女郎い格子の君とまらしけり」とのり此二本い吉原旧地に在し頃の草紙へ

吉原讃嘲記 寛文七年刻 に新町九左衛門内夕勇を評する詞に「いつも花やうなる洗髪にさられん場とらふべきを誤る青きいろざるなり。延宝ハ鼻毛なり。又 吉原矢筈 延宝二年刻 に「局めそ悲び遊るもなり」とのる注に「つぶねめそ横をきうまるをいふるべし。なるほどのさられん場なりそも横をきうさるいのりがうかさぎけるいとの今」又「七種買役目」とのるもの常ならのやうまかしくさそのるべれ。なるの初音もちとの外に春めきて」とのる注に「なるなう。さられんなうの事なり。或人曰ひていさられん場なりらんそかくらんや。

用捨箱 中十

答て曰。女郎の方へ金銀をさられん場なり尤〻」とのり前に如く當時なるを自他の混〻なる故此語釋あり。なるい取の假字初音とらふひられてかく書〻なり

吉原大雜書 延宝三年刻 に「八橋さまめそ油〻ちせびちとに小袖のちら〻にもかきつぎさを絶せつなりをつく殿〻ちにおりをせぶりの立姿さられん場が白糸のよきつりつれつ結ぶ縁」などふ事なり此ぞ〻 續画尽。笑委集。松の葉 二幅一對。夕負利生草等 にさぐの草紙に見えれど同事なれが皆略く。又 姥櫻 梓彫年号欠元禄初歟 に「やりなさい道具持。ふつさい馬のなを物。を鼓さい物。さられん場。さられん場とい唐僧の名とまろえ」とのるを花街の事を知らざる者を嘲る詞めそ。成。さらなの二ツを並出せり。又 日本荘子 元禄十四年刻 に「北歳の夏より色に浮名を取まん場とるり山谷のたるのあに身を知らを」此草紙のを取と字めそ書り作者都の錦 文流と別人 にろにる者故自他を謬ちぎさそ狂歌に詠るい 卜養集 のやうめい未見俳諧の句めもまくるでい

續山の井　寛文七年刻季吟撰

児攝我を心残さられんや　越前　古丟

京三吟　延宝六年刻

去夫の姿陽を失ひけを仙庵
（そそちん坊吊ひ人とらひ捨て　信徳）

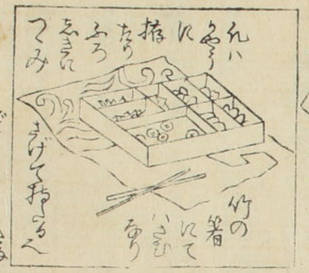
二本とも撰者ハ京ゟ古丟ハ越前ゟ　されハ此流言寛文の頃より何国ゟとも
ゆつてへるべ。又大冬舞の小歌ふ「東叡山の小攝場。金龍山のさられん場」
とゝ事ゟり上野ハ花の名所ゟ。攝の實を。さくらん場とのふより小攝場と人名の
やうふのひなそ。金龍山ハ花街の通ひ路ゟる故さられん場と對あくるゆやゆらん

十三　七色賣

昔ハ庚申を信ぜる者おとふゟ故ゆや庚申の日ゆハ七色菓子ハ賣来

用捨箱　中十三

ゟり當時の人是を七色賣とゝゟり庚申秘録ゆもとゝゟる如く七種の供物をそ
ゆつりて祭る法ゟるふゟり。それを表しゝる物ゟりとそ世説愚案問答寛保二年刻ふ曰「昔
ゟ庚申の七色甲子の七色とそゟる目一銭ゆそ七色の供物を賣ゟり其調へやうハ
干菓子砂糖大豆せんべい椒の物を調ふ。さそ供物の拵へやうハ或ハ高盤せんべい
ゟれハ（ひらゟゟふ形をゝゟ小き箱又ハ文匣ゟゞふ仕切をゟそ供物を入ゝゟ
箱の仕様ハゟゟふ記を圖の如し。外ふ袋貼布ふ銭をのれ持
ゝゟもゟり。又箱の中ふ仕切りを大きゟゟゝ七銭を入ゝるもゟり。是
も後ふ紙ゟ包を仕切り垂の箱ふ入ゟる。元禄年中まゟらゟくふ
賣ゟりゝゟ紙ふ法むやうふゟりて後程ゟゝ賣ゟ」以上愚案問答



ゟふふふ如く今ハ店ゆそ賣のゟり備物賣ゟゟる事ゟり茅ふ記ゝ如く七色菓子ハ庚申
の供物ゟるゟゟや元禄茅ゟり大黒ふも備へ今の童ハ天満宮ふ供ゟる物とのゝ思ふ

もをり　五雜組の類に庚申秘録に云ふ　そもそも青面金剛に七の数を用ふる事道家の説に更

なり本朝にも慈徳和尚の七さるの歌。古書を探らば種々なるべし。今庚申の日

にやちて鉄漿を含むときは七庚申つゝるものなりと婦女のいひならはさるも七の数

なり。是を一度ゆてんてさんとまるゆい七所の鉄漿をとゝのる事なり。初て鉄漿をかむ

者さる事をするに謬りなりんと云老のいつゝさて七色菓子とゝの支さまを古くゝゝゝを

暮紫集　万治三年刻常辰撰

七種の庚申に　七種や七味の菓子ふかのえ申　重以

七色菓子をつるべし

洛陽集　延宝八年刻

庚申夜　一説に七色賣や呼子鳥　自悦

呼子鳥は猿なりとゝ説

下学集　雅語合戦　芽ふかれば。申を少せる利にあり

又　風流美の浮橋　巻一　京新在家の事をの条に「ふやさこふもさこあるを神

用捨箱　中西

毎月七日庚申の日七色菓子の賣声もかまくゝ」などゝ事なり　此草紙主宗を不祿の本なるべし

○又天王寺の庚申にても縁日に彼七色菓子を賣り事なり是も價一文なり

天王寺伽藍記　明暦万治頃印本歟　庚申堂の条に「鰐口こゝ鳴てなり是法也。又鶏のつゝ鳴ハ七ゝに八声を鳴とあるを心なり。又菓子を一銭に七色賣て一心一念の信心をなして云云」

又　難波鑑　延宝八年刻　六の巻に「天王寺の庚申ハ諸国の本寺なり。洞の内に年ゝ七庚申あり。中略　納めて庚申まうでよと群集して十二燈ゝゝとなるる声も喧く七色の

菓子ごと賣声もいそがしく云云」とえんえて此圖あり童の姿をかへ箸を持るさま

愚按向答ふふふと合点。傘をさしゝる七色賣ハ 芦分船 延宝二年著 同三年刻 の画ゆもえんえ

天王寺名所彼岸攫 貞享二年刻 豊流撰

庚申堂　七色の難題姫が思ひや歌ゆ詠　正友

桜るゆ童話ゆ照天姫ゆ一文の銭を与へ是ゆて七色の物を買きてれと難題をいひ

けしきゆ歌を詠しとゆ事あれば此句も彼七色を一文ゆ賣し事をいひしや又

古浄瑠璃 ゆ今の判官 万治年間印本 ゆ照天姫。人買のゆあゆ義濃國青墓の長がりこゆ

賣ゆさされ流れをたてざるを遊女ゆ長憤り。六ヶ所の釜の下の芝赤火消ざゆ

やうゆ焚。十八町のゆさゆる清水を七桶ゆ汲れよるゆと姫ゆ難題をいひかゆる条ゆ

「長いるゆも心を見へと料足七文反出し。いゆゆ小銭 料足ゆて。ごう

ゆ。せいゆん。うごりを。かごりを。かいゆう。いちゆ。さて。やゝの夜のつれをゆと。買て

用捨箱 中 十五

まゆれ一色選ふものゆゆゆ流れをゆると思ゆべし。ひさしゝや照天の姫。料足を徒

反。ゆごきゆとゆそゆゆれゆを。國ゆゆゆゆゆ其時ハ片時のうちゆ百首の歌を詠じ

おちやめのをゆ至るまで唐名をつけてゆりけるまかくゆり思れば智恵のかゞもゆりを

ゆゆや唐名も忘れしよ。ゆゆまて忘れし我心。是ゆそやゝき唐名とて一くゆ買揃

長者殿ゆ奉る。まづ一番ゆ。さうゆんとハ。春のもゝめのつゞゝ。せいゆんとハ。芹の事。

うどもゆとハ。山芋。かごもゆとハ。野老ゆ。ゆいらうとハ。海老の事。いちゝゝと云て。ひと

ゆゝゆゆ。晴の夜のつれ男ハ。ゆのゆゝゆゆゆゆゆの欲。小殿原とハ。流れを由ゆ云

ゆれや。長者此由ゆ覧していゆゝまゆ此姫ハゆゝゆる者と見えてゆる情をかけて

つゝえんと十六人の下の水仕のちをゆゝゆゝゆゝ

○因ふ記雑談と見流し給へ。溝谷道玄坂をのぼりこ軒茶屋への路。中目黒のうちるべ〜右の方小高き地ふ氷川明神の社あり其左ふ延宝八庚申年と彫くる彼青面金剛の石像へ堂とゐ程ゆもあり仮の雨覆ひとかし浮世袋ふ入て猿沢池くるぐ納めあり〜を十年ぞ[illegible]ふ見てう

[出来新京土産] 寛文四年作 延宝五年刻ふ

「三條通」大橋東。白河橋よりゐ東。こ申の社あり――るんどのひんやらし。美くしき浮世袋をうけ。色よきふ袖きせ。十二燈洗米御供ゐなど備ふ」とあるふ今考ちるふ古ふ浮世袋の事のこゐへと若彼拾猿も庚申ふをきむ。原ゆそれが浅尚の神へ移し欲と思ふる。友人曰真言の壇門俗ふ云ふ金剛橛四方の柱ふ掛る金剛寶幢とゐ物あり（安祥寺の錦を[illegible]）火形をかたどりこ角ふ後。裏香[illegible]

浮世袋其形ふ似る故寶幢ふ[illegible]ら〜て神佛ふさ〜ぐるあり〜と此説ふよれば金剛の名ふ因て浮世袋ふ庚申ふ納め〜が起原ふ[illegible]

[illegible]

十四 誰袖 花袋

誰袖ハ白ひ袋ゐり紐をつけて二ッ連ふ今袂落〜とゐ物の如くして持し故ふ古画の誰袖ふ紐のつくざるハ〜。是ハ原「色ゐりも香とそなれとおもゐ見れ誰袖ふれ」宿乃梅ぞも」とゐ古今集の歌ゆて名づけ〜ゐれば楊枝さ〜とゐるとそハ名義ゆ[illegible]昔ハ多く香具賣も持来。見世店ゆても賣ゐるゐり。誰袖を白ひ袋ゐり〜とゐ証くさく

[illegible]ゐり其ニッ四ッを記を [老婆物語] 寛文四年印本 下御霊の条ふ「矢田の地蔵のおそのゐりふそこら見世棚ゐゐむまバ。かゐりたそこゐる小ゐ物のふく。ゆと愛ら〜くゐゐけゐる印籠巾着。針さ〜櫛。かゐゐ。誰袖。ゐれ〜ゆゐひの具ふ梅花ゐゐ」又 [ト養狂お集] ふ

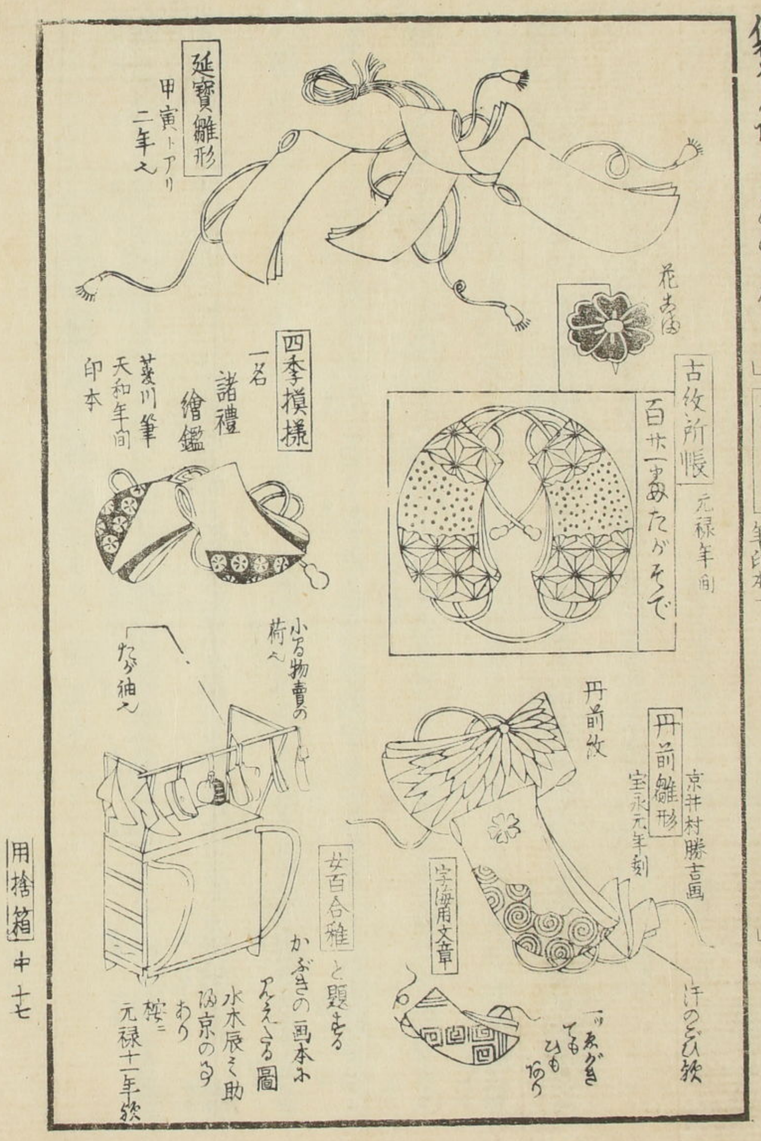
犬の誰袖ふゐるをゐ犬て引こゐをかくゐるゐふ 天和二年の写本より 初出印本とゐ小異あり

かゐてゐるゆゐひも袖〜たゐ袖とひけども君を犬のつくゆく

[同集] ふ又 若き香具屋ゐゐ[illegible]の香具をゐ〜ける略中伽羅。たゐ袖。花の露。白ひ

代袋などゝいひしなれば云云

女重宝記 元禄五年印本 「白袋 誰袖 白玉 香包」とあり



是等の圖をくはつる又「香のかをり」一名白菊物語 元禄八年刻ハ「梅花黒方るどのなき物。麝香。龍腦の誰袖云云」又「宝の市」と題する樂山黙の前句附。桂木とゝふ者の句ハ「梅ゞ香ハ誰袖捨る霜の朝」とゝふ 元禄十六年吟 ハり句ひ袋る事もく哉ハ是ハよりて思ふ今婦女子の細工物とゝふハ大方香嚢るべし。まづ。貝張ハ香貝欲 「年中定」

「例記」室町家之日記 正月十一日の条「御所〻〻への所〻ゑげハ。ゐぎ板。ゐぎのこ。白貝已下

「――」撓へも同前」とハり。羽子板。羽根。貝張とゝふ程の事と哉。白貝の事ハ是

もり古くもハらん。貝張とゝふ物近き草紙ゐもゐ多く見えぎ

「向之図」延宝八

ゐ干

張子貝 ゐゐや千源乃錦の浦 調南

此白貝張をゝひ〻多るべし。又花形の獨樂も原ハ香嚢を花袋とゝひ〻物ゆゑあり

やゝ。花代袋の白ハ万治前後の俳書ゐ多ゐ白ハ〻ぎを証とをべきを二句録を

花月千句　慶安二年刻　立圃門

白ふら〳〵山懐の花ふく袋　幸和

誘心集　寛文十三年刻　改元延宝元年ん
種寛撰

かけ香欲草乃袂の花袋　一春

花袋の白袋多る事明あり。再桜ぎるふ浮世袋も白袋るべし。二角ふ紐て紐とつけるる白袋の看板近年までのく。今もの欲不知茶ふ引ひ〳〵誰袖ハ彼ニ角るる形も見ふる〳〵たるゞ故それを精工ふ作るる。備。小女の是等の物を調ぎるる把針手業をるゝ〳〵ん〳〵あなれば費をいとひて香類をのれざる〳〵より。誰袖ハ楊枝さ〳〵と袋。花袋ハ獨樂とあり。香貝ハかゞくとふ物のやうふる。浮世袋ハ何ども名こけ雑き物とるる〳〵ふ知らん。浮世袋ハ女女のるもきびふ紐〳〵とふ證

富士石　延宝九

衣配　女の童うき世袋や衣配と友也

歳暮の白ふれば屠蘇袋の料ふ送るをらひ〳〵欲

崑山集　慶安四

花々のつぶをいうき世袋ゝふ　作者不知

玉手箱　延宝四

見まとび氣のうきよ袋や花袋　廿香屋

茶の白い花の香をふくゝ白袋るをらひ〳〵欲。後の白い香嚢を二ツ並べてらひ〳〵欲。録〳〵後勘ふ備ふ。代不りふも浮世袋の白ハれども考証ふ便る〳〵故ふ略く

○毛吹草　附合指南ふ「袋。傘。号。浮世。衣食」と見えゝるを寛永より浮世袋ゝ「のり　傘袋。弓袋。浮世袋。きんちゃく袋と附方を数へ也　又世話盡　義兵三年　同指南ふ「浮世。月蝕巾着。戯女」と記ゝ。義應より浮世巾着とふ物のり。浮世巾着る桔梗

後砂金袋　此句ハ上の五文字咲花のトのり

袋とゝ物の類ゝいのゝまゝ浮世袋とハ別物なるべし

十五 土手節 加賀節

昔こゝ谷通ひなる者の歌ひしなる節とゝふハ今俗なる踊と歌吉原雀ハ。それ編笠もそゝふおけ云云とゝの人々案の節なり。此吉原雀の歌初て作り出しなる時當時こゝ張の高多原富公翁の唱歌を見られ。ゝハ昔流行せしなる歌とそゝかゝめとなるをゝぶされしなるとゝも 桜こゝ翁ハ宝永六年の生

丙寅の二月まで予が合壁ハ住。のなる節を弾歌ハ紙ゝハ笑ゝなり唱歌ハこゝなるゝでハ徳なるゝ一歌ハ 松の葉 この巻ハ文えゝなるこゝ谷飯りとゝふさるゝ欲せゝるゝハゝらしきゝ云云

小大同小異なれゝ共ゝハ不載其二歌

○前日ハ面白かゝさゝ今日ハごとやゝ物淋しゝ。なるつを呼ハやらゝゝ。蕃をびん

残紹なゝ狭。ざんどゝなりしき物ゝ物なる。何ゝ。一口茄子ハ紅の花のなるをあゝて

蕃。何所へ。船病へおゝこきて可義智恵でまを分別ハ。なるゝく。孫ッかなるゝく

おんおやりまうさるゝへよサ。さかく憂路ハ氣ゝゆめる

○前夜色里でなやる小歌をなるらゝ。ゝのとさアきゝハ貴ゝえるんぐゝ中のところも

忘れしとさアとそゝのるべなれとそ書て世貫しゝゝそれさゝ出口へおゝそ多くこゝ義理も諸

ゝも此通りめんゝくるゝのくゝかんおやりきくさるゝよサ。以下茶こ同

野俗なる唱歌なるゝ古雅なり。此なるつを。蕃をびんとゝふ事不解歌ハ人ハ向ゝも

不知。近曽与風おゝゝハ。なるつをゝハ綿摘なるり。写本 吉原つれゝく草 宝永年間ハ傾城なるり

茶屋りのハおゝり。茶屋者なるり。綿摘ハおとり。綿つをとる。比丘尼ハおゝり云云」とゝハ

事ゝのり。蕃すびんハ。儒子髪賢。あて比丘尼の事なるべし儒子の頭巾を髪ハ替なるゝ

ゝ意ゝそ陰しゝなるゝとゝもなる。此二歌ハなるき草紙あそハ未見

雑話聞見録 文化年間編 作者不知写本

元禄の頃、たやすもしつぎ節しといふ歌

○ゆべ色里でたやする小節をうたふと後さ紀ハかぶえるんざが中の小節を忘まてさこそ、のるべいこそ書てりらふこを。たゆへをこんと落イこ義理も諸分も此通り面目ゐい。一に茄子の喰さしふ紅のついこを落イこ。ごこへ。舩宿へおいそ来こ。でぐ不でうで智恵ざを分別せいなのやうこ」

とふ歌を載こる。コヲ二歌を混じて次節ゆも歌ひ〜う次節又次歌とふ

武蔵曲 天和二年刻 千春撰

道世の余所ふ妻子をのぞき見て　芭蕉

つぎ節 耳ふ残ふ吉原　峡水

又吉原つぎ草 貞享年間作 元禄二年刻ふ「かぶ〜つぎぶ〜の小歌を色糸よ弾う玉」と

ふ事ゐるどこのれべ吉原まそふく流行し小歌ゐる事い明ゐれど精細い未考又

洞房語園ふ載こる。かゐこ谷の草深ゐれど。とふ古ゐ節の歌い。コヲ変〜古ゐ節の三弦ふい金ど名ハひと〜くてさまぐふ歌ひ〜ゐの欲

○そふ引〜つぎぐ草ふつぎ節と並べてのひ〜。かど節い誰くも知ゐ其角の撰

虚栗集ふ天和三年

三谷吟行　詩　孤加賀ふやそうぐ蛙の那　枫臭

とゐるより吉原のこまそのそゐ小歌と思ふ人もゐるめれど是ゐらぐくまそそ歌ひ〜ゐ。昔々物語ふ「六七十年以前 享保十八年より七十年前 寛文四年也 の昔。祢宜町の狂言座中村勘三郎座ゆて。多門庄左衛門。野良ふ。出来潟小ざ〜ヒ。花井支二郎。玉村吉弥。玉川千之丞。山川内記。玉川主膳 是等かゐれるき美男。掬子さての声よき者ゐり。是芽寄金で加賀節とふ歌をうくゐ出を中略その引つぎふ。梅妻貴船 ゲつま。きぶ。ゐで不長歌も此者ゐる作り出〜ゐ」 梅ゲ妻の事下巻ふゐり印本ふむめろ。ゐきつま。とゐるふ誤い此

説ふよれば加賀節いかぶき者の歌ひ出しくるり

國町の沙汰 延宝二年写本ふ。隅田川ふ船

のそびの事をよ茶ふ「此頃きこえのる猶都とふ座頭をそのせ近江うちー

紫檀の三味線金の鶏目のるらるきうふ忍だせ。芦刈の舟乃さをがちなる

音ドミふ銀のかせ掛。誰をぐかる氣色もあり。撥音けごくおそぐふ弾るし。

其空蟬の殼をかへて狂人かくのなりーやとくふ加賀節いさーも清川の

流もの水を酌ーかとのやもくる」とのそて注ふ「かぐーるとふりくるとりくど

今ふ廢らどおこーふ大事」とでえくり延宝二年ふ事ふもーとのるあて覚文

中の小歌るる拭紙るべー。又**天和笑委集** 二年之記 堺町の事をよ条ふ「法師沙門

此道ふあづこさふらへば支智学智を失ひ中略 諸經ぐく者の音声をひきかへ。

らうさい。加賀ぶー。さんがくやうのそそうもるき。ちやり小歌をくる」 さんがら節の唱歌 松の葉ふあり

又近く**京大坂茶屋雀** 元禄六年ふ。おやまの歌ふ小雲の名寄のり其うちふ「のせ節。

用捨箱 中九一

加賀節。さんさ節。ぜくこの六節云云」とのまべ前ふふ如くいづくあても狭ひー

あり。又**西鶴置土産** 元禄六年ふ「連節のかをを加賀」とのふ事のり元禄の頃ふ節も

一変もるるべー。偖。加賀節の唱歌ふ**松の葉** **續松の葉** ふえくまども用

るれば録せど。又**紫一本** **娓撰** **康子ぐるー** **洞房語園** 等ふも加賀節の事のり

十六 質屋の看板

昔ふ質屋ふ看板のり。將棋の駒の形をる板を組そ形。その板のうふ質札の

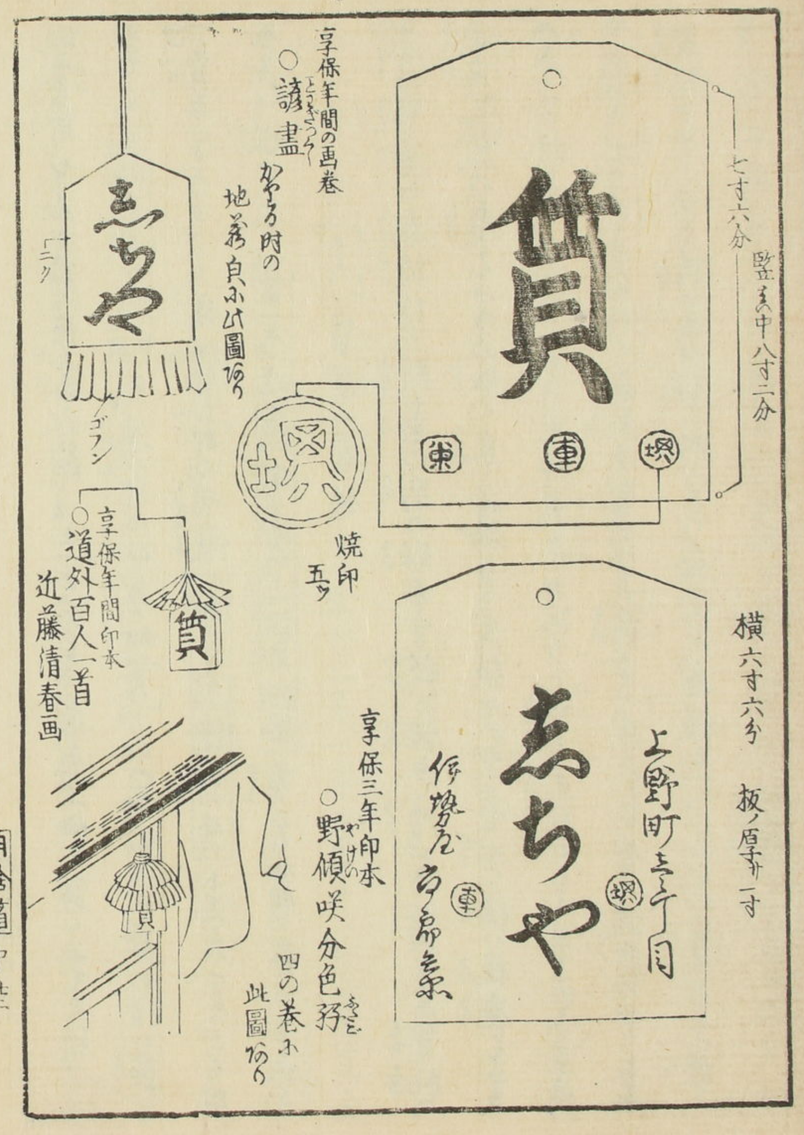
反古を。紙の塵をさきの如く束る物る。其板をかる事止て後ふ彼塵をさき

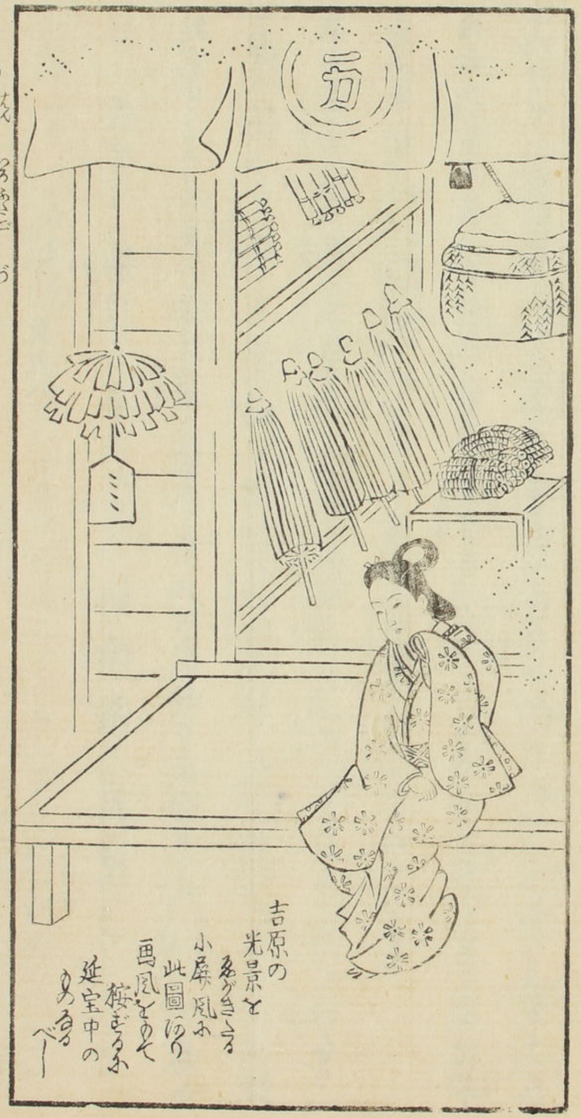
めきくる物とのこるれり。是ふ京師ふ今ものりと歩り。夫故やらん近きかる草紙

の画ふもをりく見れど板札をかきたるふ稀るり。或人の曰。昔ふ謎語のやうある

看板ふかくのり。將棋の駒の形るふ。金ふる。金銀ふかるるどのふ意るらん歟と。

予三十年前友人の家ふ伝来の看板を写ーあきくる縮圖ーて左ふ出を





京都板の色紙ふ圖なるを見れが此看板江戸ふかぎりしゝ多なるを画巻の紙を下へつけくり軒へひきく物くる故出入人ふ天窓をくさせての用心欲質札の反古をあきさまゆて胡粉ゆそ白く隈ぞりくを

他國ふハ今も質屋の看板種くなり圖を得るもあれど考へ足ざるものゝふ不載

十七　鎮鍮屋の金魚

江戸庚子　貞享四年ハ「金魚屋。下谷池之端。あんちう屋重左衛門」と記し又同所ハ「地張きせる屋。あんちう屋。市郎右衛門」とあれど重左衛門も原ハ烟管屋なるべし

向之岡　延宝八

納涼　影涼し金魚の光り鎮鍮屋　調柏

延宝中より名高き金魚商人なり〜事此句ゆゑ知らる　西鶴置土産　元禄六年刊本二の巻ハ「上野の揚　云云黒門より池の端をのぞむハ法論屋市郎とそ隠れなき金魚銀魚を賣者なり。庭ハ生舟七八十も並べて洒水清く浮藻をかれるる潛て泳ぎ」とハ事なり　西宮ハ雑俳人多くが事名を少誤りし歟　今ハさる商人の住難き繁花の地とあるとり

再云。此置土産の目録ハ「金魚が狂言もあり」とハ事なり是より前元禄紀年ハ刊行せし　風流盛衰記ハ「又の日ハ金魚を生舟ハのつめ狂言をさせけるを是もつひ

用捨箱　中巻

水ふるゝと」とハ事又なり。按ずるハ金魚の狂言とハ彼魚水中ハ宛轉し踊り狂ふ事なり。今菓を植る者狂ひ笑ひて花形の変ずるを蕣がなるとハ類ゆゑなん此事發句ハ古く見えず左ハ抄出

新續犬筑波集　万治五年季吟撰　寛文七年刻

ときどもるや狂言金魚秋乃水　松滴

十八　物茂賞て伽羅維とハ

昔ハ伽羅を愛する事今ハ過ぎ其故ハ香ある物を賞るハ伽羅とハ〜事最おゆ〜ニ子ガ幼きころの老人ゆゑ。今の俗。世事とハとハ事を。伽羅をハ。世事者を。伽羅者とハふりのなり〜。思ふハ伽羅小左衛門。伽羅休慶などハ昔の幇間も自称ゆゑなるべ。さる意ゆゑ初ハ他より名づけしなるべ〜。偖。伽羅とハ泥古く見えさるハ　烏龍物語　正保年間著写本ハ「是もめでたき御代なると上をのぐぎそ下さまの

安きをよろこぶ心さへ實ありがさき物語り沈んのこちらもすべき伽羅の道をや
譽まうさん」とあり。伽羅の道い正き道。直る道とゐ程の事なら

延宝六年
露言歳旦帳　此句　富士石　ゐ又あり

國厚う千代のつやあり伽羅の春　露言

玉の春とゐふべきを伽羅ゐかべくり。國厚うとあれば正き春とゐ意をもふくむる歟

貝おほひ　寛文十二年　松尾宗房撰

ゐをひびる声や伽羅節うぐひす初　三木

程拍子のちのひくる節ゐゐすが爲〳〵

隱蓑　延宝五

立姿世界の伽羅よりの乃春　蘭

紬ゐれ〳〵ぞこの伽羅樣梅の花　かつ野

用捨箱　中巻

容貌の艶る弐伽羅樣をどてゐふが當時の女泥欲白の作者らづれも女ゐ世界とゐふも又昔の流言。世界ゐ又とあるまゝとゐふ意ゐり。又貞女白鑑所　貞享三年印本五の巻ゐ「何某の定村とゐふあり妻室の同家中の息女。又外ゐおりひのを隠して通ひ〳〵が妻の女房恨む事色此後妾を本宅ゐられてゐるまうてるせどもあや恨ゐまゞ下つ人の男女ゐいひがひるの奥のお心やりぶかゝやと久ど心ゐる人ゐ物の種こそさづけ〳〵れ實梅檀の若生かると感じる。是より本妻を伽羅の御方と異名〳〵。妾の名を狗燈籠と欺くゐ引ゐのげられて光らゐのをとゐふ事ゐるべ〳〵」ちゐ狗燈籠の語釋をゐひて本妻の異名ゐ語釋あきを見るゐ昔人ゐ伽羅の方とゐひて操正〳〵く心直る事と沙ゑ〳〵ゐるべ〳〵。古き草紙ゐ伽羅の橋。伽羅の下駄ゐどゐふ事ゐり是も唯賞くるまでゐて。俗語ゐいんで。結構ゐ搗。結構ゐ下駄ゐり。伽羅蕗。伽羅牛蒡ゐ昔よりの名ゐるべ〳〵今香ひるき物を伽羅といのんざる欲

十九　師走坊主

近松門左衛門作の夕顔の浄瑠璃に傾城阿波の鳴戸と題せし、吉田屋の段。

伊左衛門の詞に「紙衣さへなくなりぬ破れる袖の跡に師走坊主あるまじき浪人」とあり姿やつれくしく便りなげなる者をさして師走坊主あるまじ浪人とのよ諺の昔ありしに故ふかくつづけて書きたるあり盆に僧の物のらふ事やうなれども歳暮をいさる事もなきそなり

落花集　寛文十一年刻　以仙撰

俳名　佛名を唱ふ師走坊主　勝正

此諺に實の僧の事を記したる。師走坊主などとは違ひ。今の浄瑠璃本に師走坊主の事に略てあり。

用捨箱中之巻終